

第17回 Kozoom のテーマ 「旅」について 思うこと

清水健二

私の勉強部屋(アトリエ)に日めくりカレンダーが架かっている。故日野原重明氏の言葉が添えられていて、「旅に出ませんか。本を読みませんか。必ず何か得られます。」とある。日野原重明氏はご存じの聖路加病院長をされており、100歳を超えても現役で、頑張っておられた方である。

先回のテーマが「本」で、今回は「旅」である。編集のお世話を頂いている野口幹夫兄も同じことを考えて、我々にテーマを投げかけてくれているようで、改めて敬服している。

さて、私は「本」で書いたが、人との出会いは人生に大きな影響を与えるが、本との出会いは、過去の偉人にも出会える素晴らしさがあり人生を形成する役割をしているように思える。旅もまた私の人生に大きな影響を与えたので、その一つを思い出しながら記してみたい。

サラリーマン時代は仕事の関係で、国内や海外へよく出かけたが、旅を味わう気分など全く起こらず只々仕事一筋だった。サラリーマンを卒業して20年、一転して旅の楽しみや喜びを改めて認識し、女房孝行も兼ねて一緒にあちこち旅を重ねた。私にとって新しい人生を味わうことになった。高5期ホームページには何度か紀行文を投稿し、国内外の訪問先の生活や風俗、文化など印象を書かせていただいた。今回は初めてヨーロッパへ出かけ、若い頃の田舎者の私がカルチュア・ショックを受け、その後の私の人生を豊かにさせてくれた手前味噌の話である。

1973年の秋、ヨーロッパの先進5カ国へ技術開発の実情調査を会社から命ぜられた。国が推進していたインフラ事業の一つに環境整備があり、私の所属していた水処理、大気汚染など公害関連技術の開発のために先進国の現状と将来技術への指向を調査するため主要なプラントを訪ねて見聞することであった。

当時の為替レートは1ドル350円位だったと思う。とても貧乏人は容易に海外へ行ける時代でなかった。業務命令は同伴者無しで私一人が放り出された。ロンドンに海外支局が在って、支局長が案内役をしてくれたので何とか結果的にミッションを果たし、レポートを書き取得した多くの資料を添えて報告会で発表させられ無事終わったが、仕事のことはさておいて経験した旅の思い出を書いてみようと思う。

当時は会社でも海外出張は珍しく、職場の人達が伊丹空港まで見送りにきてくれる程少なかった。転勤する人を大阪駅のホームでバンザイして送り出す光景がよく見られた時代だった。

伊丹から羽田へ、羽田からアンカレッジ経由でロンドンへの長旅だった。何もかも見るもの聞くも

の新しいことばかり、神経は張りつめた状態であった。2週間、支局長がついてくれたり、紹介状を持って一人訪ねることさえあって、語学不足などの不安もついには開き直って予定をこなしたものである。

イギリス、オランダ、ドイツ、フランス、イタリアの5カ国を巡って感じたことは、10月から11月にかけての時期だったので、夜明けは遅く、日暮れは早く、日照時間は極端に短く感じられた。ロンドンは北緯51度、アムステルダム北緯52度で、北海道の最北端で北緯46度というから、日本のはるか北に位置するため、日光も弱々しく鬱陶しい毎日で、夜の街は薄暗く日本の照明になれた目には、全く気分は晴れなかった。明るい場所で楽しく食べる習慣の日本とは違い、食材もよくわからないほど暗い灯りで、よくこんな所で生活できるものだなと感じた。

しかし一方、歴史や文化を目のあたりにし、イタリアのコロシウムなどに立ち寄り有史以来人々が築き上げ、育み残してきた文化財としての建築物や芸術品の数々を、大事にして次代に伝えることを当然と認識し生活していることに驚きと敬意を抱いた。何百年を経た古い寺院や建造物のみならず、街の広場は整然として美しい。人々の居住する家々は古びていても、建物の内外は彫刻や絵画など芸術性豊かな調度品に囲まれ、それらが生活の一部になっていることに歴史の重みを感じた。

日本もヨーロッパに負けない古来からの伝統や文化材を持ちながら、急速な経済発展とアメリカナイズされた利便性の生活に憧れて、生活の知恵で出来上がった調度品を平気で壊し捨ててしまう日常と比較して、ヨーロッパの人々の文化に対する価値観の違いを痛感した。

ヨーロッパの国々は大抵新市街地と、古い街を旧市街地として住み分けて、日本のようにスクラップ&ビルド方式を取らないから、その国の文化や伝統がそのまま永続し、人々もそれを誇りに思っている。街並も保存され広場にはモニュメントや彫刻などの装飾品は移動することもなく定位置で人々の憩いの場として受け継がれている。

日本の建築は土と木で構成されているが、ヨーロッパの建築は石とレンガ(土の焼き物)であるから、基本的に構造体として高層化しやすく壊れにくい。その国の自然の気候に適した多様な形状のデザインが特徴付けられているので変化することも無いのだろう。

高校で西洋史を教わったが、文字と写真だけを見ているだけで全くうわの空だった。しかし実物に触れて初めて歴史の凄さを実感した。ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロック、等々の建築様式やインテリアとして華麗な装飾工芸のロココ様式を目のあたりに見て、これは凄い、面白い、と独学で建築の勉強をしてみたい衝動を抱いた。そして形に残る目標を立てて挑戦するには、1

級建築士への道も一つの選択肢だと思った。

機械工学科出身の私は、建築学科を終了していないと一級建築士へは受験できず、2級建築



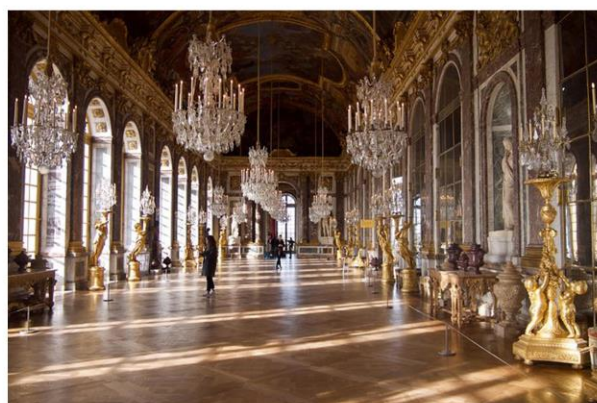
ローマのトレヴィ広場
(彫刻群とバロック建築)



ドイツ・トリーヤ大聖堂
(ロマネスク建築)



パリのノートルダム寺院
(ゴシック建築)



パリ ベルサイユ宮殿
(ロココ調インテリア)



大阪中之島中央公会堂
(ネオ ルネッサンス建築)

士の資格を先ず取って、更に実務経験を積みながら5年経たないと受験資格は無いというルールになっている。

建築概論(世界的発展の歴史、様式、デザイン、計画等)、法規、設計製図、構造力学、施工の5科目で、夫々に基準レベルをクリアーする必要があった。すでに前年、2級は難なく合格していたが、その後5年待って1978年初志貫徹した。しかし途中、1級の合格率は約10%などと聞かされて投げ出しそうになったが、建築概論の勉強は興味があって色々関連した本を楽しく読んだ。しかも私はプラント建設に従事していたことで大いに助けられた。

あれから40年以上も経った今は、難しいことはすっかり忘れてしまった。当時、1級建築士国家試験免許状を手にしたものの、給料は全く上がらなかったことは忘れないでいる。資格取得に手当は出ない会社の規約だったから仕様の無い話である。しかし仕事上この資格は随分役立って良かったと思っている。

初めてのヨーロッパの旅から、その後何度か仕事で海外出張し、気持ちに余裕もできて、各国の名所を訪ねその度に新しい感動を受けた。

定年以降は、ゆっくり旅を楽しみ各国の美術館を訪ね、ヨーロッパのみならず、中国や東南アジアの世界遺産にも触れ、彫刻や絵画をはじめ、芸術への関心は一層高まり私の人生をより豊かにしてくれたように思っている。

定年後の人生は思い出に生きるのではなく、思い出を造る生き方を望み願って来た。初めてのヨーロッパの旅で建築美に魅了され、建築を通じて芸術にも親しむことができたことはこの歳になって、本当にありがたいと思っている。

令和3年11月